

## 経済学博士天野元之助君の「中国農業史研究」に対する授賞 審査要旨

本書は、四千年の歴史をもつて中国の全域に拡張してきている種々なる農業生産形態の、総体としての発展に関する研究であつて、その研究方法の特徴を要約すれば、そこでは何よりもまず、中国各時代の古典的農書・耕織図・棉花図等についての緻密な考証と系統的な討究を通じて、中国農業における生産形態と技術的發展の態様とに關する基本的認識を確立し、その認識に基づいて歴大な史籍・文獻・資料についての細密な分析と学問的な解釈とが加えられ、そのつみ重ねの上で農業發展の段階画期をさぐり、そのようにして、中国農業經濟社会の停滞と發展とを説明せんとしたもので、著者長年研鑽の成果をとりまとめた手堅い力作である。

本書は三編に分かれ、第一編の作物編、第二編の栽培編、第三編の農具編より成る。

第一編作物編は、中国の黍・稷・粟・粱・麥・稻などの穀物と蚕桑とについての起原と歴史とに關する研究である。漢人農法としての中国農業は、華北を中心とする「旱地農法」と華中・華南を中心とする「漢人農法」としての「水田農業」とを二大構成部分とするが、その点についてはここで触れるところがなく、後の編に譲られ、ここでは主としてそれ以前の原初の問題、即ち栽培植物起原論ならびに系統論の見地からの考究がすすめられている。その考究において、天野元之助君は、史籍・農書を検討し、なお一方においては、(一)甲骨卜辞を検索し、(二)殷墟出土品に關する化学試験研究報告を検討し、必要な場合には内外の報告者に書面をもつて質し、(三)栽培植物起原に關する専門学者ド・カンドル、

ヴァヴィロフらの学説を参看し、他方においては、日・中の史学・農学部門における最近に至るまでの研究成果に關説しながら検証し、中国農業の起原と基盤とを明らかにせんとしたものである。全編は三章と附章とより成る。

第一章は中国の黍・稷・粟・粱考、附、玉蜀黍と題し、中国全土にもっとも広汎に存する雜穀について考察したもので、その第一節で黍を論じ、黍はキビでそれは殷墟卜辞にも見え、その原産地エジプト・アラビア説（下・カンドル）や中国原産地説（ヴァヴィロフ）などもあげてその起原の旧きを述べ、第二・九節では、稷の解釈についてそれはアワであるとし、アワを指す語としてなお齋・禾・穀・粟・粱などがあるとしてそれぞれについて考証し、殷墟卜辞からアワに関する研究について検し、アワ中国起原説（下・カンドルならびにヴァヴィロフ）をあげて起原の旧きを述べ、なお、稷を高粱と解する説を却けて蜀黍（高粱）即ちモロコシについては、文献的にまた原産地アフリカ説に徴して、それは後期伝来であるとして、これを本来的な稷との別を明らかにする。近世伝来の玉蜀黍についてはその最後の附節で扱われている。

第二章は中国の麦考と題して、主としてオオムギの本来性に対して小麦の伝来の時点を明確にすることに主題がおかれ、小麦の粉食に關連してウスについての検討が行なわれ、漢代の明器（副葬品）に見える磨は、上臼（雌臼）・下臼（雄臼）ともその接触面に溝が刻まれた原始的完整の域に達した磨である点にかんがみて、それは西域を通じての伝来を意味し、小麦の調整具として小麦の伝来はほぼ時を同じうすると考えられるとしている。

第三章は中国の稻考と題し、中国における稻作の淵源と印度型（Indica）日本型（Japonica）の論議に主題がおかれ、一方、広東の野生稻の粒型に短粒型があり、安徽省湖辺の野生稻に稞稻があること、他方、河南省の新石器時代

「仰韶期」(2200～1700 B. C.) 出土の土器に印した靱殻の圧痕は短粒型であり、湖北省の新石器時代末期の出土品・稲穀殻が稜稲であるとする扱いにおいて、問題点に対して深く広く照明を与えている。なお、「仰韶期」出土の土器に靱殻の圧痕があり、周代の青銅彝器の銘文に稲の字があるが、その中間期にあたる殷の場合、その出土品中にも甲骨文字中にもイネの存在を示す確証がなく、この点については、当時植栽された農作物中に稲を加えることをさし控えたとして、暗示的にしるされている。

以上の穀作に関する考察のあとで、附章として、中国の養蚕考と題し、養蚕の起原に触れ、山西省の「仰韶期」にもっとも近い遺址から出土した一つのきわめて小さい繭殻について、それは家蚕の繭ではなく蚕の原種クワコの繭とする説に左袒するとし、殷代に養蚕・織絹が行なわれ、三国・晋・南北朝時代には、織機の改良があつて絹織物業に一時代を画する盛況がおとずれたとして注目をひいている。

第二編栽培編は、中国農業における生産構造の実体と発展とについて研究したもので、本書の中核的部分にあたる。全編は二章より成る。

第一章は水稲作技術の展開と題し、主として中国における水稲作地帯「秦嶺・淮河を結ぶ線以南、とくに長江兩岸地帯およびそれ以南の地帯」を漢人農法が把握し、この地帯に本格的な水田農業が確立してくる経緯とその推移、換言すれば、中国農業史上もっとも重要な一関節たる「漢人農法としての水田農業」の構成と展開とを明らかにせんとしたもので、農書・耕織図等の組織的な研究結果がその核心を形づくる。

まず第一節で、宋代の陳衷「農書」三卷(A. D. 1149)の意義を論じ、それが江南デルタ地帯の水稲作法につい

て、(一)苗代仕立ての水稲移植法、(二)珠江デルタ地帯の「四水六基」制のごとき貯水池方式、即ち二水八基・三水七基制、(三)葑田の法を説き、一般に、水稲耕種要綱を詳述している点において、華中の水田農業はこれによって初めて定型化されたものとして、その重要性を指摘し、これを軸として、水稲作法の歴史的推移を究明するのが以下の課題となっている。第二、四節で、先秦・漢をへて三国・晋・南北朝時代までの華北における水稲作法について論じ、北方の水稲作は初め一年休閑水稲直播法であったものが、後漢に至って水稲移植法があらわれたとし、第五節では、唐代の陸龜蒙「耒耜經」が江東の事例として反転長床犁をあげていることを指摘し、なお、北方稲作の使用具と異なった農具・灌漑要具の畜力化・水力化についてもがたる。問題の宋代に関しては、第六節で扱われている。即ち、曩の陳旉「農書」・樓璣「耕織図詩」等から水稲耕種法を詳述し、その耕種の技術的過程を樓璣によるところのある図録約三〇図を複写して理解と解釈に遺漏なからんことを期している。第七、十節で、元・明・清から民国時代（解放前）までの水稲作法について論じ、元代においては、王禎「農書」その他すぐれた農書によって、水稲作に関する農具・肥料・技術が一応、体系づけられたとし、明代においては一段と展開するが清代に至って土地生産力が頭打ちし、一方では南の方の水稲二期作の耕種慣行が明確化してくるとし、民国時代解放前は従来の水稲作法そのままの継承であるとしている。第十一節では解放後の水稲作法を論じ、基本として「土、肥、水、種、密、保、管、工」のいわゆる「八字憲法」の点に触れ、技術面でウインチ捲き（絞閘犁）や挿秧機の導入を指摘している。

第二章は棉作の展開と題し、七節と二附節とにわたって、棉花の伝来と棉作の発展とを考察する。中国における棉作は後來的で、中国人（漢人）による棉花の栽培は北宋に始まるが、中国において棉作が本格的に根をおろしたのは

元代であつて、以降の急速な全国的普及の礎はここに築かれたものとする。元代における三農書、即ち官撰「農桑輯要」・王禎「農書」・魯明善「農桑」〔衣食〕撮要は中国棉作に関する先驅的意義をもち、明代の徐光啓「農政全書」〔吉貝疏〕は中国棉作学上最高地位を占めるもの、さらに清代において、方觀承「棉花図」・褚華「木棉譜」をへて農工商部「棉業新法図説」に至つて、元初以来取り上げられた中国棉作学が完成したものとし、それぞれによって、それぞれの時代の棉作・加工技術の実態と展開とを明らかにし、なお棉作の全国的普及の実情については、おびただしい数にのぼる各省の府志・県志等の地方誌によつて、丹念に記述している。

第三編農具編は、中国農業における發展と推移との技術的要因についての研究であつて、本研究の総括的部分を構成する。全編は三章より成るが、冒頭に青銅製農具の考証を内容とする第一章があつて、本編の主体は第二、三章にある。

第二章はスキの發達と題し、農業生産におけるもつとも基本的な耕耘過程を規定するところの、耕具の發達に関する研究である。この研究は耕具の技術的研究の部分と耕具の役割の部分とより成る。第一～三節はその技術的研究の部分で、まず手耕具―牛耕具、作条犁―耕犁への過程を考究し、春秋・戦国時代に(一)鉄製農具出現し、(二)牛耕、ついで犁があらわれたが、この牛犁耕の犁は作条犁で、それが漢代において全土的に拡がり、土地事情に応じて工夫・改良されて、耕起用の犁―耕犁の原型が出来上がったものとし、ついで耕犁の構造と發展のあとを追究し、後魏の犁、唐の犁、宋の犁、元の犁、明の犁、清の犁、民国の犁のそれぞれについて詳細に調べ上げ、克明な記述と図示によつてこれを明らかにし、民国にあつては長床犁が支配的であつたものが、新中国で深耕犁があらわれたことを指摘している。第四節は耕具の農業史上における役割を論じた部分で、著者は、手耕具―牛耕具へと大農具が行なわれるに

応じて、畝制の変化があらわれたと論じたのち、作条犂から耕犂への転化と保墒（旱地）農法の成立との関連に論及し、後魏賈思勳「齊民要術」には、華北における保墒（旱地）農法の原理が把握されているとし、なお二年三作型の成立の点にも触れている。中国農業史上もっとも重要ないま一つの関節たる「漢人農法の原型としての旱地農法」の成立の経緯は、このようにして明らかにされる。「漢人農法としての水田農業」がその展開の線上にあらわれる連鎖はここで明瞭となる。

第三章はウスの発達と題し、農業調整過程にあらわれるウスについて詳細に記述し、これをもって全巻が結びれている。

以上によって明らかなく、本書は、第一編においては、考古学的検索と栽培植物起原論の見地から中国農業の起原と基盤とを研究し、第二編においては、農学的、耕種要綱的把握によって漢人農法の基本的構造と展開とを明らかにし、第三編においては、農業工学的な農具研究に基づいて農業史上の段階画期をさぐりそれをもって全過程を統一的に総括する構成をとっている。そのようにして、漢人農法の基本的な構造が、本書において、初めて科学的分析に基づいて、歴史的な段階と地帯的な拡がりにおいて、統一的に規定せられることになったのである。このことは本書が、一つのすぐれた水準を獲得したことを意味する。それは学界に対する貴重な貢献である。著者三十数年にわたるその全研究過程は、ほとんどもっぱら中国農業経済研究に捧げられ、「支那農業経済論」上・中巻、下巻に相当する「中国農業の諸問題」上・下冊がその前半生の所産で、「中国農業史研究」は後半生の成果であると著者自らが語る。この点において、本書の価値は長年の研究の成果として、得られたものにほかならぬことを示している。